

中国の女性神とその芸能

廣 田 律 子

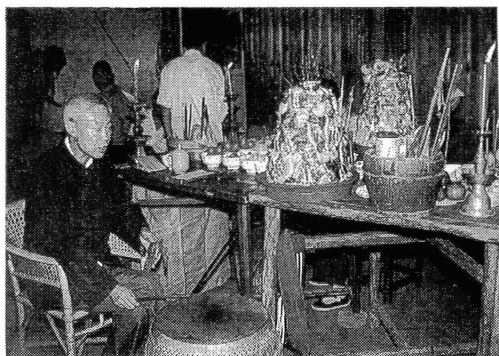
十七世紀文学と言えは『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』といった庶民のための俗語文学が光を放っている。中国人の民俗を研究する者としては、この庶民の裾野を広げて、また、明代、清代、民国から現代へと受け継がれている人々の生活の中に生み出され、溶け込んだ、文学を取り上げたい。少し泥臭く、人情味に溢れ、信仰心をも掻き立てるような、そんな説唱文学は、その性格上、唱本が残されているのは、古くとも遡れて清代半ばまでである。ずっと語り伝えられながら文字にされず時を過ごしてきたと考えられるので、十七世紀にきつと手を延ばして届くだろう。

ここでは、中国南部の浙江省で種々な芸能形態をとって唱われている陳靖姑という名の女神の伝説を取り上げたい。陳靖姑は、臨水陳夫人・陳十四夫人・順天聖母などとも称され、婦人や子供の守護神とされる。その信仰は、福建省北部から浙江省南部、そして、その地域の人々が移住した台湾やシンガポールに分布する。陳靖姑の

伝説が語られる所には廟が必ず祀られているといっている。かつてこの廟を中心に、女性達は講のような組織を作り、擬制的な姉妹関係を結び、食事をともにするなどしていた。陳靖姑の伝説は、古くは元代の張允明の『巻憶妙計』の記述に始まり、以後の地方志や隨筆などに散見することができる。特に清代中庸に里人何求が福建省の福州を中心とした民俗・伝承などを記した『閩都別記』にある陳夫人の伝説に関する内容はまとまっており、陳夫人を語る芸能の元本とされる点で、重要な文献といえる。また、伝説は七言調や小説に編され今も人々の愛好するところとなっている(注1)。伝説によれば、「陳靖姑は、唐代・正月十四日に福州(福建省)に生まれる。出生に際し、母が観音の指から流れた血を飲んで妊娠したとされる。閩山で法術を学び、その後、妖怪を退治し民を救う。大旱の折、雨請いを行うが、この時、墮胎し、それがもとで死す。死後現れ、古田県臨水郷の白蛇洞の蛇精を封じ、その地に廟(臨水宮)が建てられ、祀られ

る」とされる。

この古くから人々の間で語り伝えられている陳靖姑の一生と所業を題材にした語り物、つまり説唱芸能の種類の高さには驚かされる。私の調査では、浙江省麗水県に鼓詞、永嘉県には唱南遊・唱竜船・福建省の福州には評話を聞くことができた。また、劇として演じられるものに浙江省麗水県に人形劇を、松陽県に高腔と称される劇を見ることができた。陳靖姑という神を唱うのであるから、宗教的な色彩を帯びた芸能といえ、村や家単位で除



災や招福・雨請い・子授かり・安産などを祈願する目的で、芸人に上演を依頼し、上演に際して神まぎや神送りの簡単な儀礼を伴うこともある。しかし、芸人はあくまで宗教者ではない。

今までの調査でわかっている資料を提げて紹介して

みよう。まず鼓詞は、その名の通り太鼓と、板切れ数枚をつなぎ合わせ指に挟んで音を出す「筷」を伴奏にして陳夫人の所業を唱う芸能で、多くの目の不自由な人々の間で伝承されている。単調な七言調であたかも経典を唱えるかのように聞える。個人個人の家が病気がちの子供の健やかな成長を願ったり、子授かりを願ったり、安産を願ったりする時、また願いがかなった御礼として芸人を招いて鼓詞を唱ってもらう。

神々の像を描いた三界図と称する巻き物を掛け、その前に祭壇をしつらえる。供物として米、果物、豆腐、茸、落花生、豚の脂身、鶏、酒、茶、長命菟糕（盤形にした小麦粉を蒸し山のように積み上げた上に鳳凰、麒麟、蟹、さくら、桃、竜などめでたい図柄を施したもの）、そして紅く塗られた茹卵と乾・坤・日・月・天・地と書いた卵、また米の斗桶に粃を入れ秤や物差し、鉢、鏡、灯明を置いたものを供える。これは陳夫人が、妖怪に食われた者達の骨を計り、誰だか判断するのに用いるという。陳夫人の登場する度に、助手の婦人が線香をたき、酒をつぎ、紙の銭を燃やす。依頼人の家の人々だけでなく、近所の老婦人が子供達を連れて、祭壇に向かって礼をしにやってくる。祭壇に置かれた紅く塗られた卵は、子供達に食べさせると賢くなるという。芸人は一日唱って五十、六十元（約千円）ほどの現金と供えられていた米を得、

近所の人々とともに御馳走になる。

生まれつきひよわな子であれば、陳靖姑に子を託し、陳靖姑の子供にしてもらい、十数歳になって願もどしをし、陳靖姑に無事に育ったことへの御礼をして、また自分達の子とする。それまでは子供には陳靖姑をお母さんと呼ばせる。子供が健やかに育てと願い、子供と婦人の守り神である陳靖姑の所業に耳を傾ける時、人々はその場に神がおいでになったことを感じ、神々と一緒に歌を楽しんでいるようである。

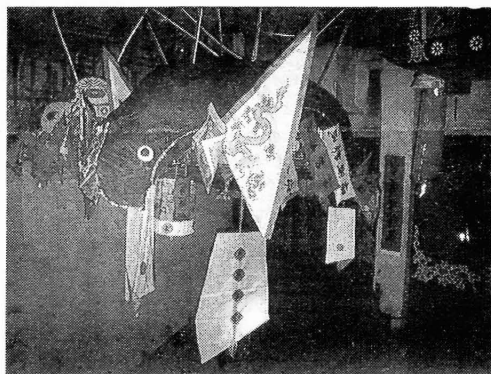


次に唱南遊だが、広く温州・永嘉地区一帯に行われる。この地域では各村ごとに陳靖姑を祭る太陰宮を見出だせると言っても過言ではない。永嘉県の太陰宮では、三年ごとに中秋節前後に七日七晩をかけて、芸人によって陳靖姑の物語りが唱われる。村

中の病氣などの災いを払う目的で村人達の主催で行われる。費用は合わせると一万元（約二十五万円）にも達する。太陰宮の陳靖姑の前には供物のほか、サツマイモを台に米粉で登場人物が作られて飾られる。また陳靖姑の修行の様子や妖怪退治を描いた紙の張り子が飾られる。一畝を超える大きなものから小さなもので紅いろうそくが灯され、それがなんとも幻想的な空間を演出する。

まず、陳靖姑の物語りが語られる前に、祭司を務める道士が陳靖姑に向かって拝礼をし、演者に向かって拝礼をし、その場を清め、観音などの神々を招く呪文を唱える。演者はこれをうけ、黄色の旗を振りながら、やはりこの場を清める文句から始め、神々の名を呼びながらお越し頂くように唱う。そして、健康で、福多く、長生きし、自然に恵まれ、作物が豊かに実り、子供が授かり、家畜も増える等々の祝言を唱う。また、天上の菩薩や宿星や土地神について唱った後、陳靖姑の物語りを唱い始める。語りは七言の講談調で、板切れを打ち鳴らしたり、銅羅や太鼓を伴奏に入れる。陳靖姑の所業を唱うなかで、ご当地永嘉の地に到る場面になると、道士の先導で皆で御輿を担ぎだし、甌江の岸まで行き、線香をたき、陳靖姑を迎えて戻る。また陳靖姑が永嘉で人々に災いを与えずに白蛇を退治する場面では、紙製の蛇の張り子が剣によってずたずたに破られ、燃やされる。物語りを唱い終わ

ると、竹の枠に紙を張って作ったジャンクに先程の蛇の燃えかすを載せて、村中を巡って最後に甌江に流す。蛇はすべての災いを代表させたものと言える。これを自分達の村の領域から永く去らしめようというのである。



紙で模したジャンク

は、実際に今もこの付近の海で漁船として使われているが、竹を縦に割ったような横の隔壁構造を持つ箱型の中国を代表する船である。船尾に、額に王の字を記した虎のような顔が描かれる。船首で大きく反り上がった舷側には、

黒目が描かれている。これは実際の漁船でも魚のいる場所を見据える意味で、同様に黒目が付けられている。この例は、村の除災の儀礼が陳靖姑の語りと同時に進行で行われる点でとても重要だと言える。陳靖姑の妖怪退治を語ることで、つまり過去の伝承の世界を今に生きかえら

せることで、現在の種々の災いも取り除いてしまえると考えている。この基礎にあるのは、やはり陳靖姑・女神への人々の信仰心以外のなものでもないだろう。現に女神の名が物語りで唱われるたびにじっと聞き入る老女達は手を合わせているのだ。



唱竜船は、陳靖

姑の小さな像を、舷側に竜の鱗を描いた船に載せ、それに足を付けて立てられるようにした「竜船」を担いで、村々、家々を回り、陳夫人の物語りを唱って歩く芸能である。子供が欲しいとか、子供が健やかに成長してほしいとか願いのある家では、芸人を呼び入れ唱ってもらおう。また、願いがかなった時も御礼に芸人に唱ってもらおう。この時、子供の毛髪を奉納するので、竜船の前にいくつも毛玉が掛けられている。いつまでも陳夫人が子供を守ってくれ

るように願ってやまない信仰の現れである。芸人は鐘を鳴らしながら、七言調で念仏のように語り、またことはぎを行う。芸人は毎年、決った村々を回って歩く。遊行する芸人に中国で出会ったのは初めてのことだった。御神体を担いで回ると言うことで、芸能と信仰とが不可分の関係を保っている例として興味深い。

しかし、芸人は神と人との仲介人となるわけでもなく、宗教者としての性格を帯びているわけではない。自分の語りに人々が耳を傾けるように陳夫人の権威の象徴を持つて歩いているようにも見える。いずれにせよ神を語り唱うことは、神がこの場に現れることを意味し、願いをかなえてくれるのだという考えがあることは確かである。

福建省の福州で人々が陳夫人にお参りする際の唱え言を記録することができたが、まずはじめに陳夫人がどのような神であるか、その所業を述べ、それから自分の願いを申し上げるのである。つまり、多くの神々のなかから、自分の願いを聞いてもらう相手の神の神格を明らかにするための唱え言を、より筋立てをはっきりさせ、色々に飾り立て、文学化したものが語り物だと言えるのではないだろうか。語り物は、永く芸人の師から弟子へとそれぞれの個性を反映させながら伝えられてきた。人形劇や地方劇、そして浪速節のような響きの評話という語りにもなっている陳夫人の妖怪退治は、浙江省、福建

省の人々の間で長い間身近に語り伝えられ、より芸能化されてきたと言える。



今もこの地方に陳夫人の生まれた地や妖怪退治をした場所、蛇の閉じ込められた穴、雨請いをした場所などと伝えられる所がいくつも見出される。そこには陳夫人の廟が置かれて、いることもあり、銀の髪飾りをつけた美しい女神が祭られ、足元には決って子供の布靴が置かれている。これは子供が欲しいと願った人が持って帰り、授かった時、二足作って返すためである。物語りに登場する兄弟達も側に置かれている。陳夫人の像が前後に二体置かれていることがあるが、それは像を御輿に担ぎだし、村々を巡って、豊作を願い、雨請いをするためであるという。

陳夫人は、婦人や子供の守り神であるばかりでなく、

この地方の人々の様々な願いをかなえる万能神であると言える。筆者は観音の變化した神格ではないかと考えている。神様を喜ばせるために、人々は神のなさったことを語り、それに長ずる芸人がより美しく唱ったり、演じたりして、人々も神とともにこれを楽しむのである。

注1 『陳一四奇伝』葉中鳴 浙江文芸出版社 など